

第3章

泉佐野市の歴史文化の特徴

泉佐野市では、海岸部及び樫井川流域沿いでいち早く人の活動がみられ、原始・古代から集落や寺院、官衙などが整備されてきた。また、熊野街道における熊野詣や、犬鳴山における葛城修験など様々な信仰が生まれ、これらの信仰と関わりの深い社寺も建立された。中世になると、貴族による日根野での開発が飛躍的に進み、当時の景観要素の一部が現在にも残る中世荘園が形成された。近世以降は、海岸部に近い旧市街地を中心に経済・文化が花開き、現在も歴史的な町並みが残されている。

歴史文化資源は、これらの歴史の重層性の中で育まれてきた。泉佐野市の歴史文化を地域環境で整理すると、海・川・野・山の4つに整理される。

1. 海によって育まれた歴史文化 ～海が育む職能・伝統～

■ 発展のカギを握る茅渚海

古来より泉佐野市は海との関わりが深く、平安時代には網曳御厨が設置され、朝廷へ魚介物を献上していた。こうしたことから湊も設置され、海浜に沿って通じる陸路と海路にも恵まれ、多くのヒト・モノが行き交う拠点となった。現在も、高速道路・鉄道により日本各地とつながり、世界中には関西国際空港が玄関口となっている。

■ 漁業・廻船業の繁栄による町場の発展

佐野村は海浜部であり、街道に沿うという立地条件から中世には市場が設けられた。その後、漁業・廻船業が発展し、まちへと成長した。特に廻船業では村の産品が全国へと進出し、町場として繁栄した。このように、栄華を誇った佐野は多くの文人を生み出した。300年以上前に食野家の庭先で紀州藩士を前に踊ったのが始まりと伝わる「佐野くどき」は、重要な伝統芸能として多くの市民によって継承されている。

■ 繊維産業の発展、「泉州タオル」の誕生

佐野浦は砂質の土壌であり、肥料となる干鰯を入手しやすい環境にあったこともあり、綿花栽培が盛んに行われていた。近世後期より、全国的に繊維産業が普及し、佐野ではチョンコ機などの織機をいち早く導入し、タオル製織に成功し、我が国初の後晒タオルを発明した。これによって「泉州タオル」は、泉州ブランドの確立へとつながった。

2. 川によって育まれた歴史文化 ～榎井川と街道沿い～

■榎井川の恵みと発展

榎井川を水源とした流域には多くの堰が設けられ、川沿いには条里制水田が生み出され、集落の発展に大きく関与した。井堰は信仰の場にもなり、また集落を縦断するように街道が整備された。特に熊野街道は熊野を詣でる人々の往来により、熊野神を勧請した礼拝施設である榎井王子などの拠点整備が行われた。

■一城別郭の土丸城

榎井川上流部の土丸と熊取町成合に所在する土丸城は、城ノ山、雨山として美しい一城別郭の双耳峰の山容を見せる。この連山は榎井川の浸食によって急峻な溪谷地形となり、自然の要害としての条件に優れている。そのため、当地域が和泉南部地域の主戦場となった南北朝の内乱では、土丸城は両軍の重要な軍事拠点として、争奪戦の渦中におかれた。

■榎井城と榎井合戦

鎌倉幕府の御家人であった榎井氏の拠点として集落内には榎井城が築かれ、南北朝時代には泉南地域の重要拠点のひとつとして争奪が繰り返された。その後、大坂夏の陣の緒戦となった榎井川と熊野街道筋での榎井合戦では、塙団右衛門をはじめ、大坂方の数多くの武将が討死し、大坂方の敗北に終わった。

3. 野によって育まれた歴史文化 ～中世荘園～

■日根郡の開発

長滝古墳群や三軒屋遺跡などが物語るように、古代から沖積地での開発は早くから進んだ。古代日根郡成立後、泉佐野市は賀美郷に属し、郡の拠点となる郡衙や郡寺が設けられ、地方政治の主要な役割を担った。古代末期には長滝で藤原氏や日根野氏によって荘園が成立し、荒地が広がる日根野以外での開発が進展した。

■水利体系の確立

近世になって日根野村最大規模の大池が築かれ、それに雨山溝が連結することで、榎井川灌漑と雨山から集水する溜池灌漑が連結し、日根野の水利体系が完成した。その後の新田開発で農業は飛躍的に発展し、木綿や菜種栽培、水なすや甘蔗などの栽培へとつながった。

■九条家による「日根荘」の誕生

失敗を繰り返してきた日根野の開発は、時の権力者である九条家によって着手され、「日根荘」が誕生した。その開発に積極的に取り組んだ村人達は団結を生みだし、ため池や用水路の造営を盛んに行った。このような村人達の慰安となった氏神の信仰やそれに伴う年中行事である大井関神社の祭りは、日根神社まくらまつりとして、今に継承されている春祭である。

4. 山によって生まれた歴史文化 ～山のくらしと信仰～

■犬鳴伝説

「犬鳴山」には、その名の由来にまつわる「義犬伝説」があるが、これは狩猟に絡んで山の神の靈威を恐れ、その後の霊場信仰に深く関わってきたことに由来している。また平野部を開拓し、定住してきた人々による長滝の「葛葉井の清水」の伝承にみられるように、水源である犬鳴山に対する信仰は極めて厚いものであった。中世末期の犬鳴山は葛城修験とともに人々の信仰に支えられ、隆盛を極めた。

■「九条政基」による村の記録

九条政基は大木の長福寺へ滞在し、文亀元年（1501）から約4年間過ごした。その間、「政基公旅引付」に当時の日根荘についての記録を残し、村人の様子やできごとを後世に伝え続けている。

■生活道、参詣道の粉河街道

粉河街道は古代紀伊国への生活道として利用されていたが、役行者により犬鳴山が開山されてからは、多くの修験者が行き交い、今も行者の滝に打たれる修験者の姿が絶えない。

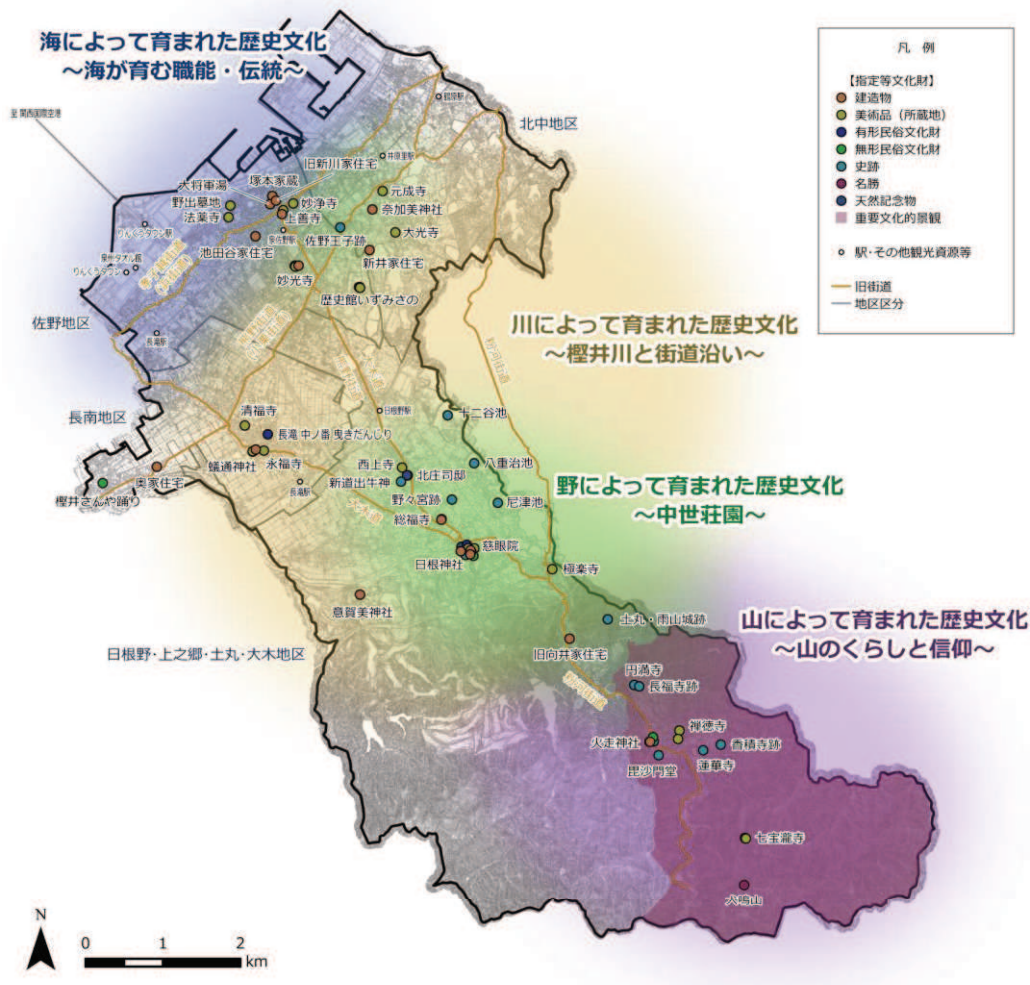


図3-1 歴史文化の特徴の分布状況